今、「上人首相」石橋湛山の生き方を考える

三原正資

多くの人にとって石橋湛山（一八八四―一九七三）は過去の人、忘れられた人です。四年ほど前のことになります。日蓮宗と縁のある自民党国会議員の方々と中川内局との会合の折り、私は湛山のことを尋ねてみたのです。ところが一、二の方を除き、ご存知ありませんでした。湛山は自民党の源流をつくった第五十五代内閣総理大臣であったにもかかわらず、政界の人々も湛山を知りません。また、私たちもジャーナリスト、エコノミスト、政治家、そして宗教者であった湛山については多くを知りません。現代宗教研究所は、私が所長在任中の平成二十七（二〇一五）年度の第四十八回中央教化研究会議で石橋湛山を取りあげましたが、これも研究所にとっては初めてのことでした。

ところが、このたびたまたま開いた『日蓮宗の近現代』（日蓮宗現代宗教研究所　一九九六）巻末の「日蓮宗他教団関係史年表」には石橋湛山についての記述はありません。

昭和二十六年（一九五一）

八・二六　宗務総監増田宣輪、サンフランシスコ講和会議全権吉田茂首相らに一路平安・使命達成の祈禱札・祈願文を進呈する

昭和二十七年（一九五二）

一・三一　吉田首相、防衛隊の新設を言明

等の記述はありますが、湛山首相就任の記述さえありません。これは現代宗教研究所が湛山への関心はなく、評価

してこなかったことを示しています。私自身、湛山への関心と評価があれば、同書の執筆者の一人として昭和三十年頃の創価学会の捉え方も少し違っていたかもしれません。『石橋湛山の六十五日』（保阪正康　東洋経済新報社　二〇二一）で高く評価されたように、同じ時期に、六十五日間とはいえ、日蓮宗僧侶が一国のトップになったのですから。

湛山の生き方をよく示したものが、湛山の首相就任の際に行われた〈座談会〉の「史上初の上人首相」（『名峰湛山』所収　湛山会編　一二三書房　昭和三十二年　この〈座談会〉は同三十二年発行『大法輪』誌三月号より転載）というタイトルです。この〈座談会〉は次のような司会者のことばから始まります。

本日は石橋学長の首相就任祝賀、おめでとうございます。石橋先生が首相として登場されるころから、神武天皇以来の景気がおこったということですが、仏教の側からいいますと、聖徳太子以来仏教者、僧籍をもつ人が、国の政治を担当されるということは石橋先生が初めてのことなので、これは千何百年以来の歴史をもつ仏教国としては最も待望した政治家の出現だと思います。

当時の仏教界及び関係者のよろこびと興奮が伝わってくるようです。そして、椎尾辨匡（大正大学学長）、望月歓厚（日蓮教学研究所長）、斎藤栄三郎（立正大学常務理事）、坂本幸男（立正大学仏教学部長）、久保田正文（立正大学教授）、三谷会祥（日蓮宗宗務院庶務部長）、江利山義顕（日蓮宗宗務院教化部長）の各氏が「上人首相」誕生を語るのです。

この座談会のタイトルにある「上人首相」という、石橋湛山を表現した言葉で、私が思い浮かべたのは、『観心本尊抄』に記されている次の一節です。

まさに知るべし。この四菩薩、折伏を現ずる時は、賢王と成って愚王を誡責し、摂受を行ずる時は、僧と成って正法を弘持す。（定遺七一九頁）

石橋湛山記念講堂の壇上正面に安置されている釈迦牟尼仏の脇士が、この四菩薩であり、日蓮聖人自身その一人で

あるという自覚を秘めていました。この菩薩は、王すなわち政治家の姿となる時もあり、僧すなわち宗教者の姿となることもあるということです。このことから考えると、上人は僧侶の尊称でありますから、「上人首相」とは、この『観心本尊抄』の一節を、湛山は体現したということになり、日蓮聖人の理想を実現したともいえるのです。

晩年の日蓮聖人は、他宗と論争が起ころうとしたとき、『諸人御返事』で次のように述べています。

（略）是非を決せしめば、日本国一同に日蓮が弟子檀那と為らん。我弟子等の出家は主上上皇の師と為り、在家は左右の臣下に列ならん。将たまた一閻浮提皆この法門を仰がん。（定遺一四七九頁）

当時の『日蓮宗新聞』（昭和三十二年一月二十日）には

石橋総理身延へ参拝
権大僧正の正装で総理就任報告
この日身延全町の歓迎は素晴らしく、戸々に国旗と宗旗をかゝげ、五連五十発の花火を打ち上げ、六千人が旗行列をして出迎えた。

と、喜びにわく様子を伝えています。

興味深いのは「石橋湛山氏の総理就任を悦ぶ」と題した〈説苑〉（＝社説）です。『諸人御返事』の同じ一節を引用して、

素より時代も異なり政治形態も違う今日、このまゝの形態が行われる筈がないが、要は正しい高度の宗教による叡智と、本仏の周遍極まりなき慈悲とを体しての政治の行わるべきことを仰せられたものであろう。

と述べているところです。

「上人首相」である湛山の一身に、宗教と政治の問題が交差していたわけです。

〈座談会〉の中では、坂本幸男が

出家の方が総理大臣になって政治をとられるというのは日本仏教の特質だと思うのです。

と述べたのに対して、当時、昭和三十一年七月、創価学会が政界へ進出して参議院に三名当選させたことから、望月歓厚が

一つ心配になるのは、創価学会がそういった面で、同じようなものだという自分のほうの裏付けにする恐れがある。（笑）

と危惧の思いを語っています。

近代世界の政教分離の原則を知悉していた湛山の脳裏に、七〇〇年前の日蓮聖人の理想が浮かんだとしても、その表現は異なったことでしょう。

湛山自身、当時の国家主義に傾いていった日蓮主義者に向けたとみられる批判的言説を遺していることもあり（以下略）（戸田教敞「石橋湛山にみる近代仏教の特質」『石橋湛山研究』創刊号　二〇一八）

と指摘されていますから湛山が七〇〇年前の考え方を、そのまま現在に投影することはなかったでしょう。しかし、昭和三十一年（一九五六）十二月、湛山が岸信介を破り、首相に就任した前後の『石橋湛山日記』（みすず書房　二〇〇一）には、実に生き生きとした「上人首相」湛山の姿があらわれています。

昭和三十一年十月九日（火）曇

午後一時米大使館にてダレス米情報局長官の歓迎会を開く。

午後三時半すぎ、列車にて身延に向う（略）

昭和三十二年一月六日（日）晴

朝早く水口屋発。身延に参拝、権大僧正に叙せらる。法主より法衣を贈らる。

同　一月十六日（水）晴

十時官邸にてアリソン氏と会見、仝氏離任のあいさつ。合せて防衛予算につき米側見解の展開あり、趣旨において私に異議なしと答う。それより前、九時、防衛庁において中国軍事部の来訪を受く。

午後一時、岸外務、池田大蔵両相と防衛問題にて打合せ。……

このように、アメリカ大使館でのダレス（一八八八―一九五九）との会合から身延山久遠寺へ向かう湛山の姿に、かつて「国のために尽す（略）宗教界にせよ、政治界にせよ」と述べた湛山の面目を伺うことができます。そこには、鎌倉幕府へ『立正安国論』を奏進し、政治の中心地鎌倉の街を往来する生き生きとした日蓮聖人の姿を偲ぶこともできるのではないでしょうか。

〈座談会〉で、望月は次のように述べています。

石橋先生が宗教家であることはもちろんですが、経済家でもありますから、将来国政を担当する上において、三具足というか、宗教・経済・政治の三つそろった、いい適当なお方であると私は感じてあります。

望月につづいて、後に増上寺に入る椎尾辨匡は湛山に期待して発言しています。

私はこの真髄は日蓮聖人以上に今度出てくると思うのです。日蓮聖人は逆境にあってそれを実際に現わすことはできかねていたのですから。そういった意味で、これは宗派をこえて全仏教がやるのみならず、ほんとうの宗教が世界的に出てくるというところまでいけるようにやっていただきたい。ほんとうの宗教というものは仏教の過去の形を打ち破っていくところにあるのですから……。（略）こういう考えで、もっと強い日本仏教ができ、また全世界の真の平和運動ができるようにやっていただきたい。

このように湛山の総理就任への期待は、今日では想像できないほど大きかったのです。

日蓮聖人は、鎌倉幕府によって佐渡へ流罪されたとき、弟子に次のように書き送りました。

法華経を余人の読み候は、口ばかり、言葉ばかりは読めども心は読まず、心は読めども身に読まず、色心二法共

にあそばされたるこそ貴く候へ。（『土籠御書』　定遺五〇九頁）

『法華経』には、教えを社会で実践するものは迫害を受けるであろうと示されています。ところが、迫害を受ける人は稀です。その点、湛山は戦争中には官憲による圧力に悩まされ、戦後は占領軍によって公職追放されました。石橋湛山は、日蓮聖人の教えを危機的な歴史の流れの中で、社会的な責任のある様々な立場で実践した人という意味で近現代の日蓮宗の中で実に希有な宗教者でもあったことを再認識して評価しなければなりません。

ところで、『創価学会への教学的批判』（中濃教篤編　東成出版社　一九六四）「まえがき」（中濃教篤）には次のように記されています。

日本の新興宗教、とくに創価学会については、仏教界のみならず、一般の文化界、ジャーナリズム界はては政党、労働組合まで強い関心を抱くにいたっている。

その熱狂的な信仰と団結、他教を邪教として排除する態度（略）、信者が票集めに狂奔する模様、どれをとって見ても関心をもたざるをえない動きである。

これが仏教団体の一つといえるであろうか？　政治と宗教との関係はどうあるべきか？　……

中濃は同書の「新興宗教と創価学会」の中では、

衆院進出（略）で完全に創価学会は政党となり、宗教としての純粋性を捨て去ったことになる。（略）

いずれにせよ創価学会の衆院進出、政党化は、宗教団体としては全く邪道に踏み込んだものであるといわなければならない。

と述べています。思い返しますと昭和三十年代、四十年代の日蓮宗一般の考え方は大体このようなものだったと思います。中濃はのちに日蓮宗現代宗教研究所所長に就任します。『日蓮宗の近現代』中の年表に湛山の記述がないわけは政治と宗教についてこのような考え方の延長上では、石橋湛山への言及は避けたかったのでしょうか。そして、座

談会で望月歓厚が「上人首相」について、「一つ心配になるのは、創価学会がそういった面で、同じようなものだという自分のほうの裏付けにする恐れがある」と危惧したことも影響したでしょう。私自身も経験した創価学会批判と左翼による体制批判という昭和三十年代、四十年代の嵐のような時代の中で、石橋湛山は異質な存在として視野の外へと追いやられたのかもしれません。

しかし、それから半世紀を経て地域社会を支えてきたお寺が衰退し、旧統一教会と政界の公共の利益に反した関係が浮上しています。「政治と個人の間を媒介し、社会や民主主義を支える政党や宗教団体などの『中間的集団』が地盤沈下することを危惧する」（『毎日新聞』二〇二二年七月二十七日）という櫻井義秀・北海道大学大学院教授（宗教社会学）や、「宗教が公共的な関心から政党への関係を築く『公共宗教』という考え方が参考になる」（同上）という島薗進・東京大学名誉教授（日本宗教史）の考え方を参考にしながら、私たちは激動の時代にジャーナリスト、エコノミスト、政治家、そして時代に即応した宗教者として生きた石橋湛山の言動に学び、宗教と政治、社会との豊かな関わりをつむぐことに目を向けるべきではないでしょうか。令和三（二〇二一）年十一月、私は菅野龍清主任とともに東京都善性寺にある湛山の墓に参り、そのおり望月兼雄住職から湛山の法号が認められた白木の位牌を見せていただきました。権大僧正の僧侶としてではなく一般人として、湛山は生涯を全うしたのです。

『法華経』「如来神力品第二十一」に示されているように、彼は「僧房」の人（宗教者）、「白衣」の人（エコノミスト）、「殿堂」の人（政治家）、「山谷曠谷」の人（ジャーナリスト）でした。〈座談会〉で、望月歓厚が「法華経は体の出家ではなく心の出家」と述べたように、湛山は時代の課題に答えようとした政治家であることによって「塔を起て」るもの、すなわち真の宗教者であったと、湛山五十回忌にあたる今年（令和四年）、私は考えています。

参照

『現代宗教研究　五〇号』（日蓮宗現代宗教研究所　二〇一六年三月）所収
拙稿「戦後七〇年　今、よみがえる石橋湛山」「三大誓願に生きる　石橋湛山の信仰」

『宗報』（日蓮宗）
平成二十七年九月号所収　拙稿「立正安国論の時代に生きて⑫」平成二十七年十月号所収拙稿「同⑬」平成二十七年十一月号所収拙稿「同⑭」平成二十九年一月号所収拙稿「月こそこころ花こそこころ⑪」

『石橋湛山研究』第四号（立正大学石橋湛山研究センター　二〇二二年三月）所収
［パネルディスカッション］石橋湛山と宗教（橋本五郎　三原正資　望月詩史）

講演「これからのお寺を考える―葬送をめぐり人々は何を期待し、私たちはどう応えるのか―」中、「石橋湛山の宗教観」（滋賀管区教師研修会　二〇二二年十二月）